

1 学校教育目標	2 本年度の重点目標
ひとりて みんなで 笑顔で	①思いやりの心と規範意識の向上 ②確かな学力の定着 ③ふるさとを愛する子どもの育成

達成度 A:ほぼ達成できた
B:概ね達成できた
C:やや不十分である
D:不十分である

重点目標を具体的に評価するための項目や指標を盛り込む

3 目標・評価							
① 思いやりの心と規範意識の向上							
領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策
教育活動	●心の教育	人権・同和教育の充実	・年間指導計画に沿って人権教育や道徳教育を計画的に行うと共に学校生活全般にわたって、指導していく。 ・学年での活動や縦割り活動などを通して互いに認め合い、人のかかわりを大切にする子どもを育てる。	・ふれあい道徳として、参観日に道徳の授業を公開し、保護者・地域の方に本校道徳教育の理解を求める。 ・6月、11月に人権教室を行い、一人ひとりを大切に、個性やよさを互いに認め合う場を設ける。 ・月初めに「いじめ・いのちを考える日」を設定し、相手を思いやることの大切さを考えさせる場を設ける。	A	・人権教室では、友達の良いところを認め、友達からよいところを教えてもらうことで、自己肯定感、自尊心を育てることにつながった。 ・「いじめ・命を考える日」のアンケートに合わせ、各学級で、道徳・学活で児童の実態に応じた授業を実施することができた。また、児童が書いた内容を教師が把握して対応することにより、児童と教師の信頼関係を築くことができた。	・保護者への「いじめ・命を考える日」のアンケートを活用し、学校だけでなく、家庭や地域での児童の様子について情報を得たい。 ・学級で気になることを、学年で共有し合い、担任だけで抱え込むことがないように環境づくりを行い、安心して児童に向き合うことができるようにする。また、得た情報を全体で共有し、共通理解を図る。
教育活動	●いじめ問題への対応	人権教育の充実 いじめの未然防止・早期発見	・重点指導事項(2つ) ①「ほかほか言葉」を使う児童を90%以上にする。 ②友達には「さん」をつける児童を80%以上にする。	・毎月、児童への心のアンケートを実施する。各学期ごとに言葉遣い等の項目を追加して、アンケートを実施する。 ・毎月保護者へのアンケートを行い、実態や要望を把握する。 ・人権教室を定期的(学期に1回)に行う。 ・全校集会において約束事について指導し振り返らせる。 ・各学期の始業式の日に「レインボー作戦」の指導を全校で行い、その後各学級で指導を行う。 ・教育相談週間を設け、子どもの心の様子を把握する。	A	・児童及び保護者への生活アンケートを毎月実施し、児童の実態把握や保護者の意識把握に役立った。 ・「ほかほか言葉」を使う児童が95%、友達に「さん」をつける児童が92%となり、言葉遣いへの意識は高くなった。 ・毎学期の人権教室により、相手の気持ちを思いやる児童が増えた。 ・学期はじめの全校指導「レインボー作戦」を受けて、各学級での指導に生かすことができた。 ・教育相談週間を各クラスで実施し、一人一人とじっくり話すことで、トラブルを早期発見でき、解決できた。 ・週に1回の連絡会で、気1になる児童についての情報共有を行い、共通理解を図ることができた。	・保護者へのアンケートを毎月実施したことで学校では分からないことに早期に対応することができた。来年度引き続き実施していきたい。 ・児童が主体になって「レインボー作戦」を行ったことにより、児童の意識が高まったと思われ、来年度も引き続き意識の向上を目指し、全校での話を受けた後、各学年、各学級で取り組んでいく。
教育活動	○特別支援教育	特別な配慮が必要な児童への支援の充実	・配慮が必要な児童は「個別的教育支援計画」「個別の指導計画」を作成し、全職員で共通理解を図りながら指導にあたる。	・継続的指導が必要な児童に加えて、新たに配慮を要する児童の支援計画を作成する。 ・教育支援会議を適宜開いたり、校内研修で児童の支援方法についての共通理解を深めたりして、具体的な支援に生かす。 ・「障害のある子どもの学校生活支援事業」による巡回相談員や外部専門家等を積極的に活用する。	A	・配慮が必要な児童は、個別の指導計画を作成し支援に生かすことができた。 ・校内支援体制を共通理解し、必要場合は関係機関へつなぐことができ、適切な対応にできた。 ・巡回相談・専門家派遣を計3回利用することで、児童の具体的な支援方法を知り、継続して支援に生かすことができた。	・配慮が必要な児童に適切な支援ができるように、今後も適宜教育支援会議を設定する。また、必要場合は臨時に支援会議を開き、職員間の共通理解を図る。 ・巡回相談員や外部専門家等を積極的に活用し助言を受けて支援に生かす。
② 確かな学力の定着							
領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策
教育活動	●学力向上	教科横断的な単元作り 算数科の学力向上	・教科横断的な単元作りを行い、全クラス授業実践をする。 ・児童アンケートで「進んで表現すること」に肯定的な回答をする児童の割合を80%以上にする。 ・算数科における単元ごとに評価テストを実施し、各学年の達成率の平均を80%以上にする。	・カリキュラム・マネジメントを各学年で年に数回行い、教育課程の見直しを行う。 ・グループ学習で、授業づくり・授業実践をし、授業力向上を目指す。 ・4月に実施する全国・県の学力・学習状況調査の分析結果から、校内研修会で児童の実態を把握し、指導に生かす。 ・スキルタイムを毎週行い、計算力の向上を図る。 ・評価テストは、市販のテストを使用し算数科のテスト結果を各学級から集めて集計し、指導に生かす。 ・3、4、5、6年生の算数の学習において、少数授業も計画的に取り入れ、きめ細かな指導ができるようにする。	A	・年度はじめ、夏休み、9月とカリキュラム・マネジメントを行った。研究授業の単元については、学習のつながりを図式化した本校独自の年間計画を作成できた。 ・教科横断的な単元作りをし、授業実践を行った。 ・全国・県の学力・学習状況調査に向けて、既習事項の復習を行ったり、結果を受けて各学年の学力を分析し、苦手としていた部分を中心に復習に取り組みせたりした。 ・児童アンケートの「進んで表現する」項目に肯定的な回答をする児童が89%であった。 ・算数科における単元ごとの評価テストにおいて、各学年の達成率の平均は86%であった。 ・算数科では、少数TT担当が担任と連携し、日々の授業実践を行った。しかし、人員の削減や年度当初の配置から変更があったため、綿密な指導を行うことが難しかった。	・来年度は、新学習指導要領に移行することで教科書が変わる。年度当初に年間計画を見て、一年の見直しをもって授業に取り組み、研究を進めることで、教師の指導力の向上と子どもたちの学力の向上を目指したい。 ・今年度の全国・県の学力状況調査の結果を生かし、話し合い活動を取り入れながら、思考力や表現力を高める指導に計画的に取り組む。
教育活動	○学習環境の整備	学習環境・家庭学習の充実 学年・学級経営の充実	・学年に応じた家庭学習時間を達成する児童を80%以上にする。 ・学習のルールを定着させる。 ・PDCAサイクルを取り入れた、Q-Uテストの結果を生かしたりして、学級経営に生かす。 ・学年の協働意識を高め、職務の効率化と児童への指導の充実を図る。	・家庭学習の手引きを配布し、家庭と連携して家庭学習の習慣を身に付けさせる。 ・学習のルールを家庭にも配布し、学校と家庭の両方で活用する。 ・年間を通して4回の「家庭学習がんばろう週間」を設け、家庭と協力して家庭学習の習慣化を図る。保護者、児童にアンケートをとって、結果をプリントで公表する。 ・木曜日の学年会の中で、情報交換や協議を行い、共通理解に基づいた協働を推進する。	A	・4回の「家庭学習がんばろう週間」ごとに、保護者への協力の要請と児童のセルフチェックによる取組を実施した。84.2%(全5回〇～1回×)の児童は、日常的に、学年相応の家庭学習時間を達成していた。事後に、協力への感謝と集計結果についてのお知らせを配布した。 ・高学年では、自主学習の内容を書く欄を設け、予習・復習・テーマ学習など自分に必要な内容を選択して取り組むようにさせた。結果、学習時間だけでなく内容にも意識を向け取り組むようになった。 ・学習のルールについては、全校で共通理解をして取り組むことにより、校内に落ち着いて学習する雰囲気が出てきた。さらに、「すっきり筆箱」「目と耳で聞く」を各学級で徹底させることで、一層学習効果が上がると考えられる。 ・今年度からQ-Uテストを2回実施した。学期ごとに研修会を設け、学年や関係の教員等、複数で課題や取組を共有した。	・「家庭学習がんばろう週間」の実施期間を、中学校の定期テストに合わせている。集計やお知らせが学期末と重なるときは、担当は負担が大きいため、実施期間を見直す必要がある。また、結果が学級ごとに差が大きかった。前回の結果の振り返りや実施期間中の声掛けを行い、児童の意識を高める必要がある。 ・学習のルールについては、年度当初や各学期の初めに、全校で一斉に指導をする強化週間を行い、担任も級外も共通理解をして指導する。また、「すっきり筆箱」「目と耳で聞く」習慣については、学年に応じて細やかな指導を積み重ねることが必要である。
③ ふるさとを愛する子どもの育成							
領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策
教育活動	●志を高める教育	自らの夢や目標の実現に向けて努力する気持ちを高める教育活動の推進	・ふるさと学習支援事業を活用した体験活動や見学及び出前授業、ゲストティーチャー等を活用しての授業を通して、郷土佐賀を愛する心を育てる。 ・体験や見学、授業後のアンケートで、肯定的な回答をする児童を80%以上にする。	・ふるさと学習支援事業を活用した学習に積極的に取り組み、体験活動や見学を行う。 ・地域の教育資源や人材等を活用した体験活動や授業を実施し、地域の自然、歴史、文化、公共施設のよさを理解する。	A	・4年生、6年生はふるさと学習支援事業を積極的に活用し、体験活動や見学を行うことができた。 ・事後のアンケートでは、4年生は99.3%、6年生は100%とほぼ全員が肯定的な回答を満足した学習ができ、佐賀市の良さや誇れる歴史・文化施設に触れることができた。	・来年度もふるさと学習支援事業を活用した体験活動や見学等を積極的に活用し、佐賀市の良さを知る学習に取り組んでいく。 ・地域の教育資源や人材等を活用した活動を、今後も計画的に実施し、兵庫町のよさを愛する心を高めさせる。
教育活動	○総合的な学習 生活科学学習 キャリア教育	ISO活動(環境教育)の充実	・「兵庫町クリーン大作戦」を行い、清掃活動を通じ地域の一員であるという意識を育てる。学校とその周辺の環境を自分たちの手でよりよいものにしようとする児童を育てる。 ・ペットボトルキャップ回収率を昨年度比5パーセント増を目指す。	・土曜授業で、地域と連携して学校や周辺地域を清掃する「兵庫町クリーン大作戦」を行う。 ・ペットボトル回収強化月間を設け、回収率アップを目指す。 ・ISO活動を学校全体の取り組みとして意識できるよう、年度初めに職員の組織表を作成する。 ・全校児童による環境ISOキックオフ宣言を行う。毎月エコ週間を設け、エコレンジャーカードのチェックを行うことで意識化を図る。	A	・「兵庫町クリーン大作戦」では、地域に出向いての活動とまではいかなかったが、校内のクリーン作戦は、親子揃って熱心に取り組むことができた。 ・ペットボトルキャップの回収も、前年度の1.2倍の回収率であり、十分に協力を得ることができた。	・クリーン作戦は、学校周辺で清掃活動が必要な箇所があまり見当たらないため、校内の清掃に力を入れた方がよさそう。 ・ペットボトルキャップの回収は、今後も運動会の日に回収ボックスを設置するなどして、家庭にも協力してもらおう。 ・児童の環境教育に対する意識を継続させるためにも、定期的に、エコレンジャーカードの取り組みを行っていく。
教育活動		地域との連携	・生活科・総合的な学習および地域行事などを通して地域社会の習慣や伝統行事のよさを伝え、郷土愛・市民性を育む。	・地域の人材バンク・教育振興会などの諸団体と連携し地域の習慣や伝統行事に触れる体験や学びの場を生活科・総合的な学習の時間に多く設け、郷土に誇りを持ち、ふるさとを愛する心を育てる。 ・学校・地域・保護者と連携・協働し、地域とともにある学校づくりを目指し、学校便りやホームページ等で情報発信を行う。	B	・各学年、社会科、生活科、総合的な学習において、地域の方をゲストティーチャーに招いたり、郷土の歴史施設や博物館の見学を行ったりすることで、地域や郷土に愛着をもつきっかけになったと思われる。伝統行事となると、それに参加する機会はなかなかないようだ。	・地域の優れた知識、技能を持った方々を活用しやすいように、人材バンクの見直しを行う。 ・地域の行事や土曜開放への参加者が増えるように、校内放送やメール等で呼びかける。また、地域の方と連携した学習の場を、ホームページで紹介し、地域の方への感謝や児童の生き生きとした様子を伝える。
本年度の重点目標に含まれない共通評価項目							
領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策
教育活動	●健康・体力づくり	運動習慣の改善や定着化	・休み時間には、外に出て元気に遊ぶ児童を育てる。	・学級や各委員会の計画により、外遊びの機会を多く設けるようにする。 ・生活重点月目標を設定し、集会の講話や掲示資料を活用した指導を行う。	A	・各学級で「みんなで遊ぶ日」を設定したり、全校で縦割り遊びを実施したりしたことで、多数の児童が外に出て元気に遊んでいた。 ・運動委員会でドッジボール大会を計画し実施したが、参加した子は意欲的に外遊びをする児童が多かった。参加していない子に対して、外遊びの機会の場を設けるようにするべきであった。	・インフルエンザが流行する時期は避けて、企画することが望ましい。 ・県のスポーツチャレンジをもっと広めて、取り組んでいく。
		望ましい食習慣と食の自己管理能力の育成	・児童・保護者に食の大切さの認識を高め、朝食の喫食率を90%以上にする。	・「給食便り」で食育に関する内容を提供する。 ・6月(全校児童)、11月(5年生のみ)と2回の「早寝・早起き・朝ご飯実践カード」を実施し朝食の必要性を喚起する。	B	・「給食便り」で食育に関する内容を提供することで意識を高めることができた。また、カルちゃん、てつちゃん、うすあし君、せんい君給食を設定したことで、児童の栄養への意識が高まった。 ・朝食の喫食率は、85.4%で、佐賀市の喫食率82.3%を超えているが目標としている90%には達していなかった。	・来年度も「給食便り」の配付やカルちゃん給食などの取り組みを継続する。 ・朝食の喫食率は、特定の児童が朝食をとっていないこともあり、今後も朝食の必要性を喚起することが重要である。
学校運営	●業務改善・教職員の働き方改革の推進	業務の効率化の推進	・時間外の勤務時間を昨年度同月比マイナス1時間を目指す。 ・会議や連絡会の効率化を図り、教職員が児童と向き合う時間を確保する。 ・健康管理委員会において、時間外勤務や年休取得状況を確認し、改善策を考え実践する。	・掲示板機能等を活用し、連絡会の内容を効率的に伝達する。 ・勤務時間確認票を活用し、職員の入力や報告用紙の提出を簡素化する。 ・タイムマネジメントを行うと共に、定時退勤日(金曜日)の確実な実施を行う。 ・業務の進捗状況を共有し、職員間で連携・協力を図る。	B	・4月～12月の9ヶ月中、昨年度同月比マイナス1時間を7ヶ月達成。 ・職員作業で大目に処分できるものは処分し、職員室や倉庫をすっきりと整理した。	・今年度の取組として、家庭訪問をカットし、希望制の個人懇談を実施した。1年生は希望者が多かったが、他学年は半数にいかないほどだった。結果、時間的には余裕ができた。学級業務の時間を確保できたが、1年を通して、児童の家を明確に把握していないことが原因で、生徒指導や人間関係把握に困ることが多々生じた。そこで、来年度は家庭訪問を復活させ、役員を前年度に決定することで、5月の授業参観を1回減らすこととする。
4 本年度のまとめ・次年度の取組							
<p>・本年度は大きく4つの領域で11個の評価項目を設定し、全職員で年間を通して取組を行った。各部の部長や各担当を中心に、具体的目標及び方策を設定し随時話し合いをもち、取組状況等を確認・見直しを行いながら、PDCAサイクルのもと継続的に実践を積み重ねてきた。その結果8項目がA評価で概ね達成できた。保護者の「兵庫小学校をよりよくするためのアンケート」からも、ほとんどの項目で90%以上の肯定的な回答が得られ、教育活動に対して高い評価を得ていると考える。また学校評議員会において学校の現状や取組について説明をしたところ、「どの項目にも真剣に取り組んでおられ、しっかりと頑張ってもらえてありがたく思っています。」など、各委員から肯定的な意見をたくさん頂くことができた。全職員が共通理解・共通実践のもと組織として取り組んできた成果だと考える。</p> <p>・来年度以降も常に継承と改善の視点で教育活動を見直し、児童の実態に即したよりよい目標を定め、具体的方策をより実効性のあるものにし、児童の自己肯定感の更なる向上を目指していきたいと考える。児童・保護者・地域・職員が一体となって、学校教育目標の実現に向け、成果のある取組を実践していきたい。</p>							
●は共通評価項目、○は独自評価項目							